

8月9日（金）

福岡2日目 全国的に暑い日、福岡も35度を越えることが予想される日。本日も多忙ななか、32人の先生が参加。

### 1時間目 小巻泰之先生講義「高校教科書で教えるくマクロ経済～デフレの話～」

名古屋、大阪での講義と質問を踏まえて資料を補充したものの解説をしたうえで、講義をはじめめる。

内容の基本はこれまでと同様なので、名古屋の記録を参照されたい。



講義をする小巻先生

アンケートを実施

結果は興味深い。地域差がはっきりでている。これから物価は下がる、の回答がここでは結構でている。九州地区は直近10年間で、賃金の下落率が最も大きかったのが九州地域であり、その影響のあるのかもしれない。

新しい内容は以下のとおり。

教科書の問題点の紹介。金融政策の図など用語変更を追いかけていないものもある。説明が難しい箇所の指摘もする。

量的緩和政策に関して、日銀と民間銀行の貸借対照表の説明を加えて解説。

なぜ預金準備率操作をしなくなったのかの理由の解説。（技術的理由、時代の変化）。

大事なのは実質金利の予測である（教科書の記述と現実のギャップを説明するポイント）。

予測の地域差、中学校でのクラス差の説明を加える。特に名古屋、大阪、福岡の先生がたの違い。大阪型（小遣いが入ったら前より使う）にならなければ景気は良くならない。

信用創造の説明の仕方のヒントでは、漫画の週刊誌のまわし読みと同じで理解すると生徒に分かりやすい。

コール市場の説明の補足の説明を行う。

質疑

1 民間銀行の預金はなぜ負債になるかがわからない？

答え 預金は銀行にとって資金調達的手段であることから負債となる。その資金を貸出し

て収益を上げている。その収益の一部が預金利息として支払われている。

2 不況で使わなくなったお金はどこにいったのか？

答え 家計ではたんす預金、企業では内部留保などの形で滞留している。

3 ゼロ金利がわからない、ゼロ以下の金利というのがあるのか？

答え ゼロ以下になることもありうる。諸外国をみれば、スイスで名目金利がマイナスになったこともある。なお、現在の日本は、実際には金利は完全なゼロ%ではない。資金の取引に関する手数料などに相当する部分があり、ゼロではない。

## 2 時間目 新井授業提案+野間敏克先生「経済の授業をエコノミストと作るく4つの基本概念を教える」

新井の授業提案は、以下の資料に基づいて行われた。ただし、冒頭部分の自己紹介や授業作りの部分が拡大して、授業プリント関連の説明が駆け足になった。

資料は以下のとおり

1 これまでの授業作り

経済の概念や理論を紹介し、経済だけでなく人生に役立つことを願う

業界用語で言えば、「経済的見方や考え方」を持つ、深める、使えるようにしたい

基本概念、ミクロ、マクロ、国際、ディベートという順番で構成

経済学的内容構成になっているが、実はかなり倫理、道徳的要素が強い

2 4つの概念とは何か

①出発点としての希少性

②意思決定の基準としてのコスト（特に機会費用）

③世の中を読むための需要供給の法則

④自分を生かすみんなを生かすための比較優位

3 なぜこの概念にたどり着いたか

アメリカの経済教育との出会い（JCEE⇒NCEE⇒CEE）、マンキューなどのテキスト

株式学習ゲームの立ち上げに協力したこと→市場は需要と供給の世界

批判に応えながら試行錯誤の結果…弱点は多い（例：仕組みの理解が弱い、現実性が弱い）

4 具体的な授業事例

普通科進学校の高校生を対象とした授業イメージ（授業風景を紹介）

前提として、ほぼ教科書どおり、説明そのものはオーソドックスなプリント授業

希少性と機会費用：進学の経済学

大学に行くのがよいか、それとも就職がよいか？

大学にゆくための費用は？ 学費+放棄費用

大学に行くメリットは？ 学問の享受、資格、将来の所得増、それだけ？

関連して、なぜ大学進学率が上がるのか？

需要供給の法則：進学の経済学の続き

シフトを理解すると世の中の動きを予測することができる

需要・供給が増えたら（需要増・供給増との区別をしっかりとさせる）

大学生の希少性がなくなったら

ロースクール事例、薬学部事例など将来の選択とのかかわりを考えさせる

比較優位：職業選択の経済学

授業そのものは理論の説明、貿易ゲームの実施、比較優位は固定的ではない

比較生産費説的に見て君の比較優位は何？と問いかける

野間先生のコメント

経済まで行くか心配した。新井先生の授業は経済学的である。概念学習は重要である。根本からの理解が可能になり、忘れにくい。また、仕組みを学ぶから仕組みを変える思考に結びつく。他の分野でも応用できる。

四つの概念は適切だとおもう。ただし、何箇所か授業の進め方は注意したほうが良い箇所があった。（需要供給のところの進め方、順番など）

●新井先生からの質問に答えて。

機会費用を教えることの可否は？ 価値ありとおもう。

仕組みを理解させることと概念や理論を教えることとのつながりは？

なぜこういう仕組みになったのか、この仕組みがなかったらを考える手がかりになる。

生き方と結びつけることは？ あまり性急にやると経済学帝国主義（ベッカー流）になってしまう。

単純な理論だけで分析しても良いか？ 比較生産費説でいえば、現代はリカード流の完全特化でないので、単純に考えてそのうえで合わないことも注意したい。

### 3 時間目 教材提案と経済解説

#### 榊原宏司先生(東京証券取引所)講義「高校教科書に出てくる M&A その仕組みと現状」

##### 1 教科書に載っている株式

株式持合いの変化の図も掲載されている教科書もある。それを見ると、金融機関が減り、事業法人が減り、その代わり海外投資家が増えている。これは、株式持合いからグローバル支配へという基本的な変化があることの反映である。金融機関は長期保有。短期売買しているのは海外投資家（売買代金の7割を占める）である。

## 2 株式は地域制の強い商品

それが所有構造から変化を始めている。株式市場のグローバル化、企業もグローバル化している。海外投資家は運用指示、リスクを避けるという点からも市場一部銘柄中心の運用をしている。

## 3 M&A の動向

M&A は 1990 年後半から急増。円高、海外展開などの理由による。なぜこの時期に増えたか？ 理由 1：これまで話した所有者の変化 理由 2：株価の格差 理由 3：会計・法制度の変化である。

M&A 定義は結構ファジー

TOB の事例。TOB での誤解 取引所を通してではなく、取引所の外で行われる。

MBO の事例。

新しい動向として理解してもらえると有難い。

### 教材紹介「ケーザイへの3つのトビラ」指導 東京証券取引所石山晴美さん

基本は名古屋、大阪と同じ。名古屋の記録を参照してください。



さいころで一喜一憂する先生方

### 質疑

1 計算の仕方が分からない箇所がある

答え 分かりやすく解説する。

2 株式を公開するリスクはどうなっているか？

答え（榊原） 株価は下がるなどのリスクはあるが、それを越えるメリットがある。

#### 4 時間目 野間敏克先生講義「歴史を経済の観点から読み解く<世界恐慌>」

基本的内容は、大阪での講義と同じだが、福岡改訂版を作成して講義をすすめた。



講義をする野間先生

篠原先生の作成したものを大幅に改定。中学の先生方との対話のなかで要望などがあり欧州との関係を拡大している。

構成は 1 事実経過の確認 2 背景①産業革命 3 背景②金本位制 4 失敗の相互作用 5 戦後の国際経済体制となっている。

##### 1 事実経過の確認

世界恐慌には、バブルの要素が全部登場している。きっかけ、新規そうに見えるもの、投機的参加者、ひろがりの四つ。バブルは必ず崩壊する。

29 年ごろからかげり、暴落、直後の楽観的なフーバー発言、取り始めた政策が失敗だらけ。

アメリカの金融危機へ。銀行倒産、取り付け、連鎖、拡大 金需要が増える 郵便貯金への流出、流動性不足から銀行経営問題へ、さらに実体経済へ。

アメリカ大恐慌へ。生産などの急激な減少。失業者 25% (不況と恐慌の違いは？ 一宿題)。

ヨーロッパへの拡大。流動性危機への対応から金の取り合い。フランスはエゴ的な動き。

銀行倒産、実体経済への影響。

##### 2 恐慌の背景①産業革命 内容はこれまでと同じ

資料 p13 の 産業革命がもたらしたものは新規作成

##### 3 恐慌の背景②金本位制 これが一番のポイント、持って帰って欲しい部分。

恐慌からの回復と金本位制 バーナンキ発言「早く金本位から離脱した国が早く恐慌から回復」

p15 金本位制の原理 五つの特徴 (2011 年の篠原講義をもとにしている)

固定為替相場制 (金平価) は金融や貿易を安定化させる効果を持つ

金本位制と金輸出禁止の関係 (補足的な部分だが、高橋財政の時期はこの部分)

第一次大戦前の金本位制 イギリスを中心とする国際金融システム (バックスブリタニ

カ)。イギリスへの資金集中とイギリスからの投資の還流

世界恐慌時の金本位制 アメリカを中心とする資金還流システムが一応できる。

1925年の英国の金本位制への復帰 このときに旧平価で復帰（政策の失敗）、金がヨーロッパからアメリカへ流出する。その金がアメリカで消費ブーム、株式ブーム。株高、金流出はアメリカの高金利が原因として金利低下を要求、アメリカはそれに応える。その結果アメリカでは低金利、株高を招く、それがバブルになってしまう。

アメリカを中心とする金の還流図（新規作成） 他国に還流しないでその資金は株式市場に向かう。ここはきわめて重要な箇所である

#### 4 世界恐慌をもたらした政策の失敗

フーバーの政策はことごとく失敗

アメリカの株式暴落だけでなく、ひろがる なぜ、その時点での矛盾がここで爆発

報復の連鎖（囚人のディレンマ）が起こる。誰が悪い アメリカ？ イギリス？ フランス？ アメリカにとってよかれとおもう政策が他国を悪くする、それがアメリカを逆襲する。

アメリカの内向きの政策 総需要管理は政府の仕事ではない、ヨーロッパの経済危機が広がっても最低の公共事業しかしていない。

それどころか… 均衡予算政策をやる、不況期の金融引き締めをしている、高関税による国内産業保護（スムート＝ホーリー法）。

欧州の対応 金流出対応のための公定歩合の引き上げ

ニューディール政策とその評価

政府の本気度を示し、国民の空気を変える？

国家が経済に介入をした、規模は大きくないが方針を変えた。産業保護、総需要管理政策、社会保障・労働保護、グラススティーガル法など。ケインズ政策と見られるものは少ない。ローマー、林さんなどは効果がなかったといっている

p33 何をやればよかったか？

各国が需要拡大政策

金に対する通貨切り下げ

世界全体の政策協調 の三つがあれば

アメリカ以外への影響

ドイツ ハイパーインフレ、レンテンマルクの奇跡、ナチの台頭

日本 井上財政、高橋財政。

（戦争がはじまる）

ブレトンウッズ体制の仕組み 世界恐慌の反省が生きている

## まとめ

ストーリーを持って語る  
前後の歴史のつながりを考える  
国境を越えたつながりを考える  
現代に通じるものがここにある

## 質疑

1 ニューディールの評価が厳しいが？

答え 昔とは違う。それでも気持ちを変える効果はあったかもしれない。

以上で、福岡の教室を無事終了した。暑い二日間だったが、先生方の熱心な参加で、ここでも密度の濃い教室となった。

記録文責

新井